

みかんぢょうちん

ちゆうごくどうわ
中国童話

いでざわ ま 念—と
出沢万紀人訳



せんこくれつこう せしよかんきようぎ かいせんてい らしよ
全国学校図書館協議会選定図書

おうぶんしや としよかん
旺文社ジュニア図書館

みかんぢょうちん



みかんぢようちん

一つぶの種たね

二つの目め

シャオポと妹いもうと

祥ちゃんしやうちゃんの胡弓こきゆう

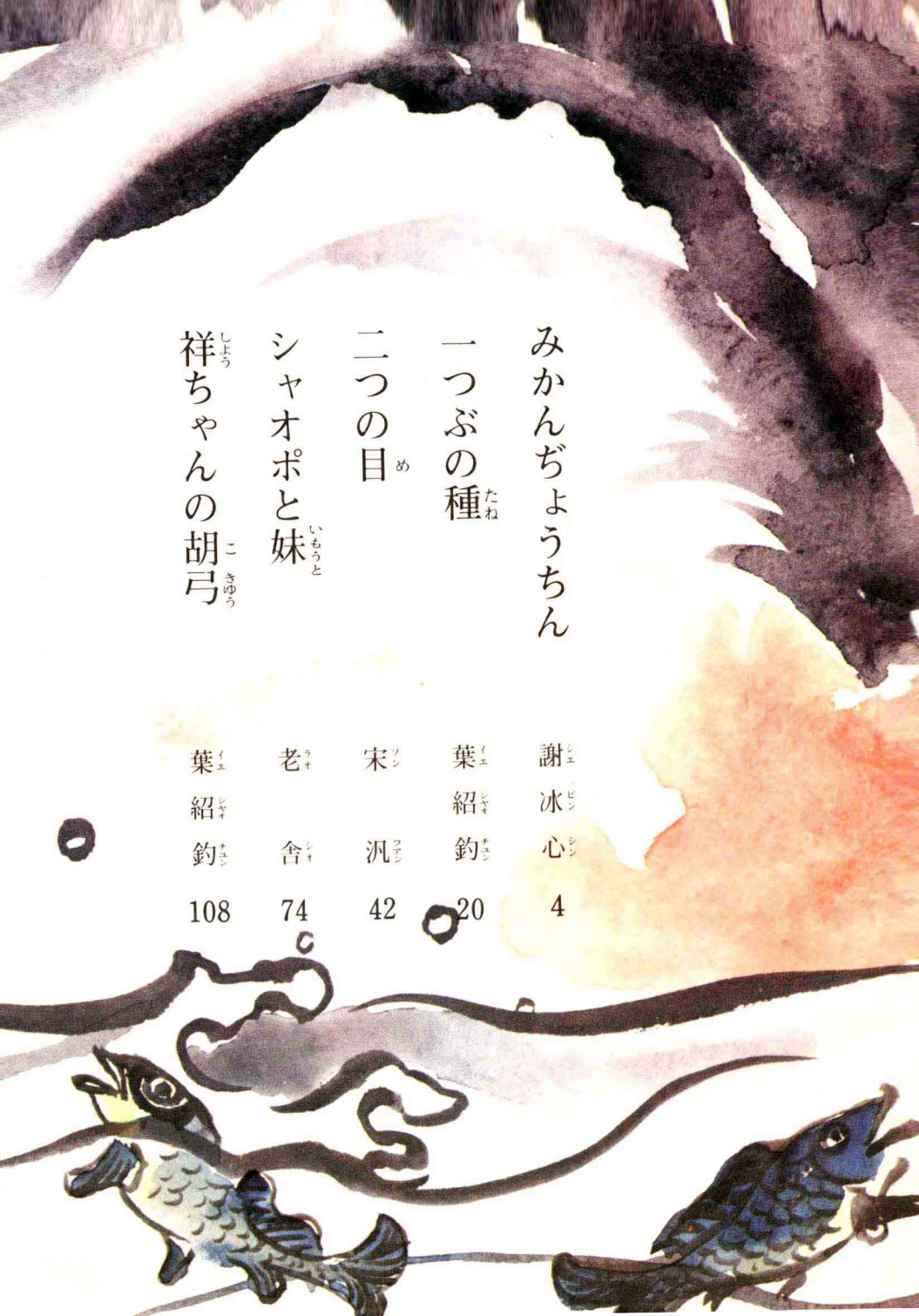
謝冰心シェンビンシン
4

葉紹鈞イェシヤウクン
20

宋汎ソンファン
42

老舍ラオシェ
74

葉紹鈞イェシヤウクン
108



ま
と
め

赤坂 あかさか
包夫 かねお

145

解 説 (父母・先生がたのページ)

中国の児童文学

出沢 いでざわ
万紀人 まきひと

151

鑑賞と読書指導

赤坂 あかさか
包夫 かねお

155



みかんぢょうちん

謝^{シエ}
冰^{ビン}
心^{シン}

これは十なん年前のこ事です。

正月祭り（春節と言つて、正月十五日のもよし）の前の日の午

後、わたしは重慶（中国西南部の中心城市）の町はずれ

に、友だちをたずねました。友だちは、

その村の村役場の二階にすんでいたの

です。



うすぐらい階^{かい}だんをあがると、四角^{かく}なつくえが一つ、竹^{たけ}のこしかけが二つ三つと、かべに電話^{でんわ}のついた部屋^{へや}があり、通りぬけるとそこが友^{とも}だちの部屋^{へや}で、外^{そと}とのさかいはただカーテンが一まいさがっているばかりです。

友^{とも}だちはるすでした。まどべのつくえにはカードがのっついていて、急^{きゆう}な用事^{ようじ}で外出^{がいしゅつ}するから待つようにと書いてありました。

わたしがつくえの前^{まえ}にこしをおろし、

ありあわせた新聞^{しんぶん}をとって読^よみはじめると、

とつぜん、外^{そと}の部屋^{へや}のドアがぎいっと

ひらき、しばらくすると、だれかが

竹^{たけ}のこしかけをひきずる

音^{おと}がきこえます。





カーテンをあげて見ると、ひとりの女の子、ハつか九つぐらい、やせぎすで青白い顔、寒さでむらさきになったくちびる、髪を短くかつて、古い服を着て、はだしの足にぞうりをはいた子が、竹のこしかけにのぼって、かべの受話器をどろうとしたところで、わたしを見ると、びくつとして手をひっこめました。

「電話でんわをかけたいの？」

女おんなの子こはこしかけからはいおりると、こつくりしながら、

「××病院びょういんのホウ先生せんせいをよびたいのです。おかあさんがいまさつき、たく

さんの血ちをはいたので。」

「電話番号でんわばんごうはわかつていますか？」

女おんなの子こは頭あたまをふった。

「いま電話局でんわきょくにきこうとしたとこなの。」

わたしは、いそいで電話帳でんわちやうをめくって番号ばんごうをさがしてから、またたずねました。

「先生せんせいがおられたら、どこへ行いってもらったらいいでしよう。」

「ワン・チュンリンの家いえで病人びょうにんと言いえば、すぐ来きてくれるんです。」



わたしが電話をかけてやると、女の子はよろこんで礼をのべ、くるつとむこうをむいて帰りかけます。わたしはひきとめるように、

「あなたのお家は遠いの？」

とききました。

すると女の子はまどの外を指さし、

「あの谷間の、大きな木の下です。ちよつと歩けばすぐです。」

と言いながら、トントントンと階段をおりていきました。

わたしは部屋にひきかえして、新聞の表と裏をすっかり読み、そのうえ、『唐詩三百首』（中国の清の時代の本）をひっぱりだして、半分も読みました。あたりはだんだんうす暗くなってきたのに、友だちはまだ帰ってきません。

わたしはつまらなくなつて立ちあがり、まどの外の、こいきりにつつまれ

た、おぼろな山をながめ、あの大きな木の下の小屋を見つけたとき、ふとさ
つきの女の子と、病気の母親をたずねようと思いつきました。二階からおり
ると、門前で大きな赤いみかんを買ってカバンにいれ、でこぼこの石をしい
た道を通って、あの小さな家の前につきました。

そつとドアをたたくと、さつきの女の子が出てきて、頭をあげてわたしを
見ると、ちよつとびっくりしてから、につこりして、手をあげてまねきいれ
ました。部屋はせまくて暗く、かべぎわの板のベッドには母親が目をつむつ
て横たわっていました。ねむっているらしく、ふとんには点点と血のあとが
のこっています。むこうむきなので、顔にかかった髪と、頭のうしろのまげ
しか見えません。ドアの近くにおいた小さな火ばちには、小さなべがかか
っていて、かすかな湯気をあげていました。

女おんなの子は、火ひばちの

そばちいの小さなこしかけを

持もつてきて、わたしを

すわらせ、自分じぶんもそばへ

しゃがんで、しきりに

わたしの顔かおを見みあげています。

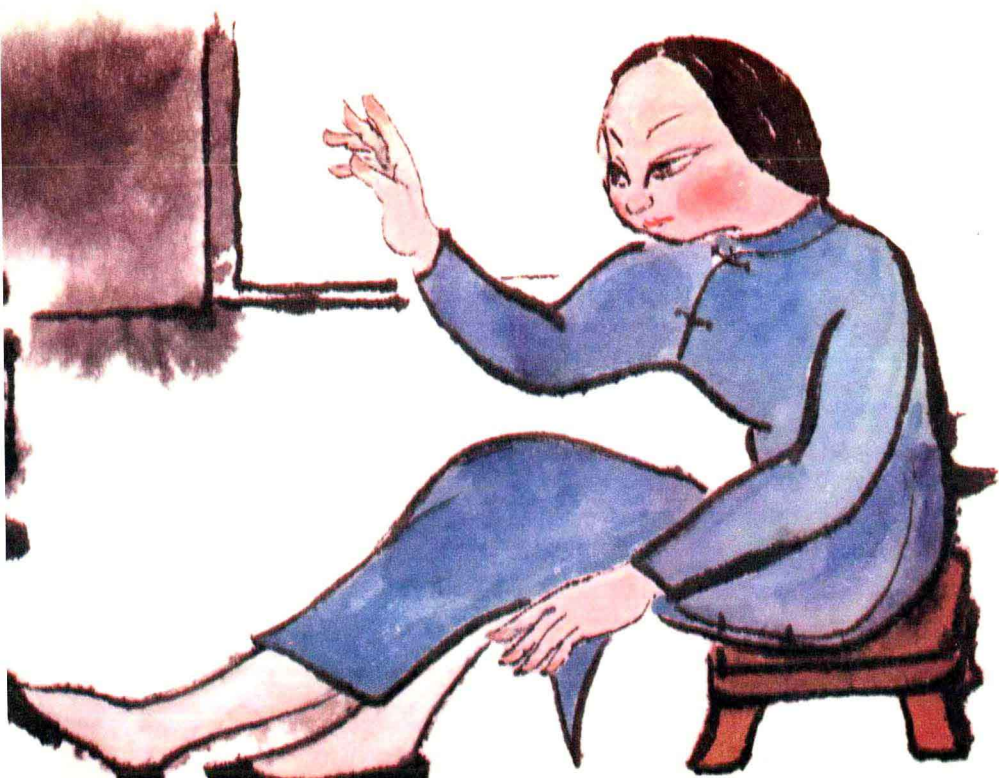
わたしはそつとたずねました。

「お医者いしやさんはみえて？」

「はい。来きました。注射ちゅうしやを

してもらったので、――

おかあさんはいいあんばいです。」



それから女の子は、わたしを
安心させるように、

「だいじょうぶです。先生は、
あしたも早く来てくれますから。」
と言いました。

わたしは、またたずねました。

「おかあさんはなにかたべられるの、
このなべの中はなあに？」

女の子は、

「おいものおかゆ。——お祭りの
ごはんです。」



と言つて、にっこりしました。

わたしはみかんを持つてきたのを思いだして、ベッドのそばの小さなテールにしなければならぬ。女の子はだまって手をのばして、いちばん大きなのをとり、ナイフで上の皮をそつとはぎ、両手で下のほうを持つて、静かにもんでいます。

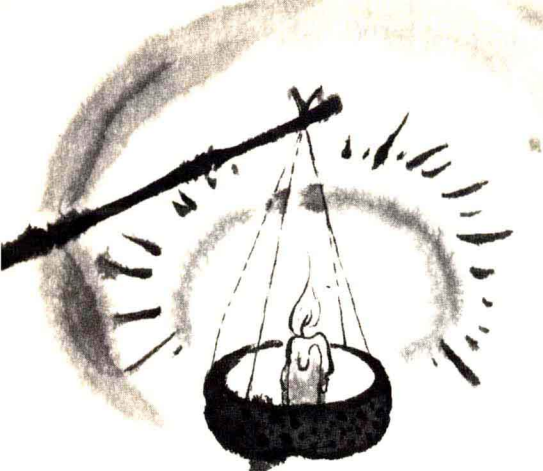
わたしは小さな声で、

「おたくでは、ほかにどなた？」

「いまはだれもいません。お父さんはよそへ行つちやつて——」。

女の子はそれだけ言つて、ゆつくりとみかんの皮の中から、一ふさずつつまみだしては、母親のまくらもとへならべています。

火ばちの火もだんだん暗くなり、外はもつと暗くなったので、わたしは立



ちあがりました。女の子はわたしをひきとめながら、すばしこく、あさ糸をつけた大ばりをもちだし、すばやくみかんのおわんの四すみにむすびつけて、小さなかごを作り、細い竹にぶらさげ、まどべから短いローソクをさがして中にたて、火をつけてわたしに手わたしました。

「道が暗くてすべるから、このみかんちようちんを持つてのぼってくださいな。」

わたしはよろこんでうけとって、お礼を言い、女の子は入口まで送ってくれました。わたしがなんと云ってやつたらいいかこまっていると、女の子は、またわたしをなぐさめるように、

「もうしばらくで、お父さんはきっと帰ってきます。」



そのときはおかあさんもよくなるでしょう。」

と言いました。そして、手で、前に大きく円をえがいて、その手をわたしの手におろし、

「わたしたちみんな、しあわせになるでしょう。」
と言ったのです。

この「みんな」の中には、はつきりとわたしもいれてあると思われました。